英語の先に自分で選ぶ人生があった

セブ留学とオーストラリアでの挫折
海外勤務と独立の記録



横田 涼
RYO英会話ジム

英語の先に
自分で選ぶ
人生があった

セブ留学とオーストラリアでの挫折
海外勤務と独立の記録

横田 涼

目次

はじめに 英語で何が変わるのか 4

これまでの歩み 6

第 1 章 自信がなかった僕と英語との再会 7

第 2 章 セブの 2 週間から 8 ヶ月の留学へ 11

第 3 章 オーストラリアで 自信が崩れた 18

第 4 章 父の一言から 海外就職へ 27

第 5 章 違う価値観の人と暮らし働く 32

第 6 章 海外経験を 自分の仕事に変える 37

第 7 章 暮らす場所と人とのつながり 44

第 8 章 英語を自分の言葉にする練習 51

おわりに 小さな会話から始める 57

著者について 59

はじめに 英語で何が変わるのか

英語が話せるようになったら、何が変わるのでしょうか。

海外旅行で注文に困らなくなる。仕事で英語のメールを書けるようになる。外国人の友達ができる。どれも、その通りだと思います。

でも、僕にとって一番大きかったのは、仕事や人間関係、住む場所を考えるときの選択肢が増えたことでした。

こんにちは、リョウです。僕はセブとオーストラリアで学び、フィリピンを中心に 7 年間の海外勤務を経験しました。

その後、英語コーチングサービス「RYO 英会話ジム」を自分の事業として運営するようになりました。2020 年からは海外を拠点に、オンラインで仕事を続けています。

こうして経歴だけを並べると、英語を学び、海外で働き、独立まで順調に進んだように見えるかもしれません。実際には、自信がついたあとで何度も壁にぶつかっています。

セブでは英語が話せると思っていたのに、オーストラリアでは日常の会話すら聞き取れない。ようやく手に入れたアパレルショップの仕事では、コミュニケーションの不足を指摘され、解雇される。

海外就職を実現してからも、会社員を辞めて自分で仕事を作るときには、また別の不安がありました。

それでも、英語があったから入れた場所があります。自分の言葉で話したからこそ、深まった関係があります。

その一つひとつを振り返ると、僕の人生は「英語を完成させてから動く」という順番ではありませんでした。今の自分にできる範囲で動き、足りないものに気づき、学び直してきた。その繰り返しでした。

この本では、僕がブログに残してきた体験を、留学、仕事、人との関係、独立という流れに沿ってお話しします。終盤には、そこから得た英語学習の考え方と、今日から取り組める練習もまとめました。

ここに書いたのは、僕自身が選び、迷い、うまくいかなかったことも含めた経験です。自分なら何を選びたいか。そう考えながら読んでもらえたらうれしいです。

今、英語を勉強しているけれど、その先の姿が見えない方。海外で暮らしてみたいけれど、自信が持てない方。これまでの経験を、次の仕事につなげたい方。

そんな方が、自分にとっての次の一歩を考える材料になればうれしいです。

これまでの歩み

留学から海外勤務、独立へと進んだ道のりをまとめました。初めからこの順番を決めていたのではなく、そのときの経験が次の選択につながっていきました。

時期	出来事	経験と変化
大学時代	初めてのセブ留学	2週間の短期留学で、英語を使う楽しさを知る。
大学休学中	セブで8ヶ月学ぶ	授業に加え、友人との会話や日本語を教える活動を経験する。
その後	オーストラリアへ	ゴールドコーストで働き、英語と仕事の壁に向き合う。
帰国後	海外就職を選ぶ	父の言葉をきっかけにフィリピンでの仕事を探す。
海外勤務期	仕事の幅を広げる	翻訳・通訳、教材制作、指導、マネジメントを経験する。
2018年5月	退職し事業づくりへ	講師の採用・研修、教材、サービスの仕組みを整える。
2019年	RYO英会話ジム創業	自分の経験を、英語を学ぶ人のためのサービスへ。
2020年から	海外を拠点にオンラインで働く	仕事を続けながら、暮らす場所と人との関わりを選ぶ。

第 1 章 自信がなかった僕と英語との再会

英語が身近にあっても 続けられなかった

子どもの頃、僕の家には英語がありました。母は英語を教えていて、家で海外からのホームステイを受け入れることもありました。

だからといって、僕が最初から英語を熱心に勉強していたわけではありません。小学 4 年生の頃に母から教わったこともありますが、長くは続きませんでした。家族だからこその甘えもあったのだと思います。

それでも、家に来た外国人と、身ぶりや知っている単語を使ってやり取りした感覚は残っています。言葉が十分に出てこなくても、相手に通じて笑い合える。

まだ英語の仕組みもよく分かっていなかった僕にとって、言葉を使う意味は、そんな場面の中にありました。

今振り返ると、母が英語を使い、学び、教えている姿を見ていたことも、自分の中に残っていたのだと思います。

英語を使う世界は、遠くて特別なものというだけではありませんでした。自分の家の中にも、その入口があったのです。

自分の軸が見つからなかった時期

中学生の頃は、駅伝や走ること、バスケットボールなど、スポーツに夢中でした。それが楽しく、自分の中で大事なものでもありました。

高校に入ってスポーツをやめると、少しずつ、自信を持てるものがなくなっていきました。周りには自分の目標を見つけている人がいる。その姿を見ながら、僕は自分の進む方向がはっきりしないままでした。

大学に入ってからは、高校時代の反動もあって、自由な生活を楽しみました。友人と夜遅くまで飲み、そのまま大学へ行くこともありました。

当時は楽しかったのですが、その生活だけで、自分が何をやりたいのか分かったわけではありません。

そんなとき、当時付き合っていた彼女から、外国人に日本語を教えるボランティアを紹介されました。そこに参加して、昔の感覚が戻ってきたんです。

家に来た外国人と、なんとか話そうとしていたこと。言葉が通じたときの楽しさ。高校の頃、国際科へ行きたいと思っていたこと。そうした記憶が、自分の中でつながりました。

自分は、こういうことをしたかったのかもしれない。英語を本格的に学ぶ気持ちは、その実感から強くなっていきました。

調べた単語を すぐ使いたかった

そこからは、電子辞書を持ち歩くようになりました。知らない単語を調べ、使う。気になった表現があれば、また調べる。映画を見ているときまで単語を調べて、彼女に映画を楽しもうと言われたこともあります。

今なら、その場は映画に集中しようと思います（笑）。ただ、それくらい英語を知ることが楽しかったのは確かです。

発音を褒めてもらったり、英語が話せることに驚かれたりすると、それも自信になりました。自分が取り組んだことを、誰かが受け止めてくれる。その反応があるから、また学びたくなりました。

将来の仕事は、まだ決まっていませんでした。ただ、面白いと思えることがあり、自分にもできることが少しずつ増えていった。その変化が、当時の僕を動かしました。

英語を始める理由は、仕事に必要だからでも、旅行を楽しみたいからでもいいと思います。そのうえで、自分が実際に楽しいと感じる場面を見つけることは、続けるための助けになります。

僕の場合は、人と話すことでした。勉強の成果を、人の反応として受け取れる。それが、英語との付き合い方を変えていきました。

今の僕から 当時の自分へ

面白いと思えた感覚を大切にしてほしい。あの頃は、それが将来の仕事につながるとは思っていませんでした。人と話してうれしかったことや、もう一度使いたくなった言葉を、次の学習の入口にしてよかったのだと思います。

この章から 自分の入口を探す

自分が「もっと知りたい」と思った英語の場面を、一つ思い出してみてください。映画の一言でも、海外の人との短いやり取りでも構いません。

まだそうした経験がなければ、英語を使ってみたい相手や場面を書いてみる。その一つが、教材を選ぶ前の手がかりになります。

第 2 章 セブの 2 週間から 8 ヶ月の留学へ

英語力を完成させた 2 週間ではなかった

21 歳のとき、初めてセブへ短期留学しました。期間は 2 週間です。その前に兄や友人とタイを旅行し、東南アジアの雰囲気に惹かれていたことも、フィリピンを選んだ背景にありました。

現地でマンツーマンの英語レッスンを受けられると知り、せっかくなら、たくさん話してみたいと思いました。

その 2 週間で、自由自在に英語が話せるようになったわけではありません。簡単なやり取りならできても、話題が広がるとよく分からない。相手が笑ったから一緒に笑い、理解したような顔をしてしまう。そんな場面もありました。

でも、全体として強く残っているのは、困った記憶より、楽しかった記憶です。先生がこちらの話を拾い、話題を広げてくれる。自分の知っている英語が、目の前の相手に通じる。それがうれしくて、また話したくなりました。

この短期留学の意味は、英語力が完成したことよりも、「自分は英語を使う環境が好きなんだ」と知れたことだったと思います。

韓国人のルームメイトから学んだこと

ドミトリーでは、韓国人の留学生と同じ部屋で暮らしました。彼は僕より英語をよく話せたので、一緒にいる時間そのものが練習でした。

学校へ行く。食事をする。遊びに行く。部屋で話す。そのたびに、英語で何かを伝える必要があります。授業の課題だから話すのではなく、今、一緒に行動するために話す。その違いは大きかったです。

彼の使う言い回しを聞いて、こういうときに使うのか、と真似していました。教科書の例文と違い、相手の表情や状況が一緒に残ります。

帰国後も交流が続いたことを考えると、2週間で持ち帰ったものは、覚えた単語や表現だけではありません。言葉を使ってできた関係が、留学のあとにも残りました。

帰国後に続いた 毎日10分の音読

最初の1週間ほどで、すでに2週間では足りないと感じていました。毎日、新しい人が来る。知らなかったことを聞く。行動する場所が広がる。そうした日々が、終わってしまうのが惜しかったんです。

日本へ帰ってからは、毎日10分ほど音読するようになりました。フレーズも少しずつ覚えました。やらなければいけないという気持ちより、もっと話せたら、次はもっと楽しくなるという気持ちでした。

英語を使う経験が先にあり、そこから学びたい理由が生まれた。この順番は、その後の僕の学習でも繰り返されます。

短期留学に意味があるかどうかは、何を持ち帰りたいかによっても変わります。僕は短期間で英語を完成させることはできませんでした。でも、次の行動につながる動機は、はっきり持ち帰りました。



フィリピン・セブの語学学校の受付。留学生活を振り返ったブログより。

大学を休学して もう一度セブへ

その後、大学を休学し、8 ヶ月のセブ留学をしました。母の支えがあって実現した留学です。

同じ予算を使うなら、できるだけ自分が話す時間を増やしたい。その思いから、マンツーマンで学べる環境を選びました。

朝 8 時頃から夕方まで授業を受け、空き時間には教材を音読する。放課後は韓国人の友人たちと過ごし、夜も英語を使う。自分の生活の中で、英語を使う時間を増やしていきました。

学校の最初の評価は初級で、卒業前には上級の評価になりました。

ただし、これは当時の学校内での評価です。後にオーストラリアで受ける衝撃を考えると、あらゆる環境で困らなくなった、という意味ではありません。

僕が成長を感じたのは、評価の名前より、会話の中で以前覚えた表現が自然に出てきたときでした。一語ずつ組み立てずに言えた。相手の反応まで見ながら話せた。そのような小さい変化が増えていきました。

先生の前と 友人の前では違う英語が必要だった

マンツーマンレッスンは、自分が話す量を増やすうえで役立ちました。でも、授業を受けているだけでは足りないとも感じました。

友人との時間には、授業とは違う難しさがあります。自分の気持ちを伝えたい。冗談に反応したい。将来の話をしたい。そうした場面で、準備した答えだけでは追いつきません。

うまく言えなかったら、調べる。相手の表現を聞いて、自分でも使う。同じ話をまた別の場面でする。英語が、問題を解くための知識から、相手との関係の中で使うものへ変わっていきました。

一方で、海外にいても日本語だけで過ごすことはできます。僕自身、いつも理想的な英語環境を作れていたわけではありません。日本人と話す時間もありました。

だからこそ、海外にいることと、英語をたくさん使っていることは、分けて考えるようになりました。場所を変えるだけではなく、そこで誰と、何をして過ごすかが大事だったのです。



セブ留学の仲間たちと。8 ヶ月の留学での学びを振り返った記事より。

英語を学ぶ場所で 人生の選び方も知った

8 ヶ月の留学では、同年代の学生以外にも出会いました。会社を辞めて次の道を探している人。すでに事業をしている人。60 代、70 代で学びに来ている人。

大学にいるだけでは、接点の少なかった人たちです。

僕は経営者の方に、仕事で何を大切にしているのか、どうやって会社を経営してきたのか、と質問していました。英語を学びに来たはずなのに、人の生き方を聞くことにも夢中になっていたんです。

ある経営者の方とエレベーターに乗ったとき、相手を先に通すことを教わった記憶があります。小さな振る舞いですが、その人は自然に相手を気にかけていました。

後に仕事をするようになってからも、自分が何をしたいかに加えて、相手に何が必要かを考えるとき、その場面を思い出します。

留学中には、週３回ほど、日本人とのハーフの子どもたちに日本語を教えるボランティアもしました。教室で英語を練習することに加え、誰かのために何かをする。そのために言葉を使う経験でした。

今思えば、セブで増えたのは会話の表現だけではありません。働き方や年齢、進路について、自分が当たり前だと思っていた範囲も広がりました。



セブ留学の記事に残した、空港での一枚。

今の僕から 当時の自分へ

授業の外でも、誰かと話す時間を作ってほしい。先生の前で言える英語と、友人との会話で出てくる英語は違いました。一緒に食事をしたり、相手の話を聞いたりする時間も、留学の大切な一部だったと思います。

この章から 環境を一つ具体的に変える

自分の一週間を振り返り、英語を実際に口にする時間を確かめてみてください。勉強の時間と、誰かに向けて話す時間を分けて書くと、次に増やしたいものが見えます。

留学を決める前でも、一回の会話や交流の予定を入れることはできます。

第 3 章 オーストラリアで 自信が崩れた

語学学校の外には 別の難しさがあった

セブ留学を終えた頃、僕には日常会話ならできるという感覚がありました。次は、英語を使って働いてみたい。そう考え、オーストラリアのゴールドコーストへワーキングホリデーに行きました。

その準備では、大阪の喫茶店でアルバイトをし、半年ほどで約 60 万円を貯めました。セブ留学では親の支えを受けていたので、次はできるだけ自分で準備したいという気持ちがありました。

金額は当時の僕のケースで、今の渡航費用の目安ではありません。

渡航後、自信は早い段階で揺らぎました。当時の彼女の友人と車で移動していたとき、二人の英語のやり取りがほとんど聞き取れなかったんです。彼女は以前オーストラリアに留学していて、現地の英語に慣れていました。

僕は、日常会話はできると思っていました。でも、目の前で進む日常の会話に入れない。自分の中の「できる」と、実際に求められていることの間に、距離がありました。

先生は、学習者に合わせて言葉を選び、分かるように話してくれます。生活や仕事で出会う相手が、同じように調整してくれるとは限りません。

話す速度、アクセント、決まり文句、会話の前提。新しい環境では、慣れていないものが一度に増えました。



オーストラリア滞在中に訪れた、海沿いの灯台。

海外で働いても 英語を使うとは限らない

最初に見つけた仕事は、ホテルや短期賃貸の部屋を掃除する仕事でした。働き始めることはできましたが、英語を使う機会はほとんどありませんでした。

その後、日本食レストランでも働きました。接客では英語を使い、多国籍のスタッフとも一緒に仕事をしました。ただ、その仕事は短期で終わり、また仕事を探すことになりました。

海外で働くという言葉には、英語で話しながら働く姿を想像しやすいと思います。でも、どの仕事に入り、どんな役割を担うかによって、一日の中で言葉を使う量は変わります。

僕は、英語を使う仕事に入りたかった。だから、雰囲気のよさそうな店へ履歴書を持って行き、応募しました。配った履歴書は 100 枚近くになります。

一緒に来た彼女は、仕事を見つけて生活を進めていました。その横で、自分は仕事がない。彼女への焦りや嫉妬もありました。

自分のやりたいことに向かっているつもりでも、人と比べる気持ちから自由だったわけではありません。



オーストラリア・ゴールドコーストのシェアハウスで、仲間と囲んだ食卓。

働くには まだ英語が足りないと言われた

仕事について悩んでいたとき、外国人のルームメイトから、今の英語力では働くのは難しい、まず学校へ行ったほうがいいという趣旨のことを言われました。

セブでは評価されていた自分にとって、厳しい言葉でした。でも、込み入った会話になると聞き取れず、答えられないのは事実でした。

覚えた表現が出せることと、相手の発言に合わせて会話を進めることは、同じではなかったのです。

それでも、もう一度学校へ戻るのではなく、働く場所を探し続けました。英語を使って仕事をすることが、そのときの自分の目標だったからです。

やがて、オーストラリア人オーナーのアパレルショップから連絡が来ました。面接で聞かれそうなことを考え、何度も練習しました。そして、採用されました。

自分以外は外国人という職場です。ようやく、求めていた英語環境に入れた。うれしかったし、ここからだと思いました。



オーストラリアのシェアハウスで、友人たちと。

採用のあとに 待っていたもの

ところが、その職場で 3 ヶ月ほど働いた頃、オーナーとの面談で解雇を告げられました。理由は、コミュニケーション力の不足でした。

履歴書を配り、面接の練習を重ねて、ようやく入れた職場でした。採用の連絡を受けたときには、うれしくて涙が出そうになった。その仕事を、自分の英語で続けることができなかったんです。

今振り返ると、聞き取れないことを怖がり、自分から会話に入ることを避けていた部分があります。

間違えたくない。かっこ悪いところを見せたくない。同年代のスタッフもいる中で、見栄もあったのだと思います。

黙って仕事をしていれば大丈夫だと考えたくなります。でも、分からないときに質問することや、自分の状況を伝えること、相手に関心を示すことも、一緒に働くうえでは必要でした。

仕事を失った日は、帰り道で涙が止まりませんでした。道端で、偶然彼女に会いました。

心配してくれましたが、何があったのか、理由を言えませんでした。悔しさと恥ずかしさがあって、言葉にできなかったんです。

英語を学んで得た自信が、どこでもそのまま通じるわけではない。そのことを、オーストラリアで思い知らされました。

働き切れないままでは 旅を楽しめなかった

ワーキングホリデーの残りは、3ヶ月ほどでした。友人からは、オーストラリアを旅してみたらと勧められました。でも、何かをやり切った感覚がないままでは、楽しめない気がしました。

アパートの家賃収入があったため、生活費は何とかなっていました。それでも、自分の中にあった「働き切る」という目標を、このまま終わらせられませんでした。僕は再び履歴書を配りました。

今思えば、ビザが3ヶ月しか残っていない状況で、新しく雇ってくれる職場を見つけるのは難しかったと思います。

それでも、そのときは、仕事を探し続けることが唯一の選択肢のように感じていました。結局、最後の3ヶ月に、新しい仕事は見つかりませんでした。

路上のギタリストが見せてくれた 別の力

そんな時期に、心の支えになってくれた人がいました。路上でギターを弾いていた、ヤマトさんです。

年齢は僕とそれほど変わらないのに、自分の演奏で街ゆく人を惹きつけ、拍手をもらい、収入を得ていました。

ほとんど英語が話せなくても、自分の力で人を喜ばせながら、オーストラリアで暮らしている。その姿に、僕は励まされました。

ヤマトさんは、自分で作った曲を販売したり、バーでライブを開いたりしていました。僕も時間があると演奏を見に行き、いつの間にか仲良くなりました。

アパートへ遊びに来て、ギターを教えてくれることもありました。彼女と一緒に弾き語りをした時間も、心に残っています。

英語がうまく使えず、仕事を失った僕のそばで、ヤマトさんは自分のできることを使って、人とつながっていました。英語力だけがすべてではない。彼との出会いは、そのことに気づくきっかけになりました。

英語を伸ばすことは、これからも続けたい。でも、その英語を使って自分は何をするのか、人とどう関わるのかも大切でした。

仕事ではやり残した気持ちがありながらも、人に支えられた時間を持って、僕は日本へ帰りました。



ワーキングホリデー中の僕。オーストラリアでの仕事探しを振り返った記事より。



ゴールドコーストのシェアハウスに集まった、さまざまな国の仲間たち。

今の僕から 当時の自分へ

分からないときは、分からないと伝えていい。聞き取れないことを隠して会話から離れると、相手も僕が何に困っているのか分かりません。

もう一度言ってもらう、理解が合っているか確かめる。まずは、会話に残るための言葉を持っておきたかったです。

この章から できないことを小さく分ける

「英語ができない」で終わらせると、次の練習を選びにくくなります。聞き取れなかったのか、質問ができなかったのか、分かったふりをしたのか。

最近困った一場面を選び、どこで止まったかを書いてみてください。直す対象が小さくなると、行動も具体的になります。

第 4 章 父の一言から 海外就職へ

帰国したら 日本で働くものだと思っていた

オーストラリアを離れ、日本の大学へ戻りました。以前の同級生たちは、すでに社会人として働いていました。自分はこれから進路を決める。その状況に、焦りがありました。

貿易会社や英会話学校など、関心のある会社の面接を受けました。でも、どこか気持ちが乗りませんでした。海外にいたときのほうが、自分らしくいられるという感覚もありました。

それでも、日本で就職するのが普通だと考えていました。自分が何を望むかより、今は就職活動をしなければいけないという思いが先に立っていたんです。

父に悩みを相談したとき、こう言われました。

「海外で働きたいから、フィリピンで英語を勉強してオーストラリアで就業経験をしたんじゃないのか？」

父の言葉を聞いて、自分が日本での就職を当然のこととして考えていたと気づきました。海外へ行きたいという気持ちは、自分の中にまだ残っていました。

その言葉で、自分のしてきたことと、今の気持ちがつながりました。僕は、また海外で働きたかった。その気持ちを、なぜか進路の中心に置けていなかったのです。

望みを認めると 調べることが変わった

海外で働くことを具体的な目標にすると、情報の集め方も変わりました。候補はフィリピンとシンガポール。英語を使って働ける場所を調べ、転職サイトやエージェントを利用しました。

最終的には、留学で過ごした経験のあるフィリピンを選びました。自分が現地で働き、暮らす姿を想像しやすかったことも大きかったと思います。

短期渡航して、オンライン英会話会社や貿易会社の面接を受けました。帰国後、結果を待ち、次の渡航を準備していた頃に、オンライン英会話会社の内定の連絡を受けました。

別の会社からも内定をいただきましたが、新しいことに取り組めそうなベンチャー企業を選びました。好きで続けてきた英語を、今度は仕事の中で使う。その入口に立てたことが、うれしかったです。

自分の希望に気づいたあとには、調べ、応募し、渡航して面接を受ける日々がありました。父の言葉をきっかけに、その手続きを一つずつ進められるようになったのです。

小さなオフィスで始まった仕事

入社した頃のオフィスは、小さなスペースでした。フィリピン人スタッフ、日本人スタッフ、カウンセラーなどがいる、これから事業を育てていく段階の会社でした。

僕は教材開発やカスタマーサポートを担当しました。自分が学ぶ側だった英語を、今度は学習者に届ける側で考えます。

どんな教材なら理解しやすいか。質問にどう答えれば安心してもらえるか。学ぶ対象が、英語そのものから、サービスや仕事の進め方へも広がっていきました。

オーストラリアで経験した飲食や接客も、お客様に対応するときの土台になりました。うまくいかなかった時期も含めて、過去の経験が違う場所で使われていく。仕事を始めて、そんな感覚を持つようになりました。

初めの半年は、新しい生活と仕事が楽しく、自分の選択に満足していました。一方で、日本で就職した同年代と比べて、特別な道を進んでいるような優越感もありました。

今思えば、そこにも、人の物差しで自分を測る気持ちが残っていました。

働き続けるうちに大事になったのは、海外にいるという肩書きより、何ができるようになるかでした。場所を変えたことを誇るだけでは、その後の仕事は進みません。目の前の業務を通して、力を増やしていく必要がありました。



フィリピンで就職した頃の小さなオフィス。教材開発やカスタマーサポートを担当した。

英語が必要な生活が 学習を変えた

その後の仕事では、翻訳や通訳、教材制作、講師、カウンセリング、マネジメントなど、さまざまな役割を経験しました。

特に英語の伸びを感じたのは、アメリカ人やインド人の同僚と働き、私生活でも英語を使う時間が長くなった時期です。仕事でも生活でも英語を使う。会話の量が増えるだけでなく、扱う内容も広がりました。

この状態が約 2 年間続いたことは、自分にとって大きかったと思います。留学やワーキングホリデーにも意味はありましたが、海外にいた時間すべてが同じ密度の英語環境ではありませんでした。

実際に使う必要があると、覚える理由がはっきりします。言えなかったことを放置すると、次も同じところで困る。だから調べ、また使う。練習が、暮らしや仕事の続きになりました。



フィリピンのオフィスにて。初めての海外勤務を振り返った記事に残した一枚。

今の僕から 当時の自分へ

日本で就職するのが当然だと思う前に、自分が働きたい場所を調べてみてほしい。僕の場合、父の一言で、漠然とした気持ちが行動の目標になりました。希望する国の求人を読むことが、次の一歩でした。

この章から 希望を調べられる形に変える

海外で働きたいと思ったら、まず「どの国で、どんな役割をしたいか」を仮に決めて、実際の求人を一つ読んでみる。海外就職でなくても同じです。

望みを具体的な募集条件や必要な経験と照らすと、今の自分との差が見えてきます。すぐ決断しなくても、調べることは始められます。

第 5 章 違う価値観の人と暮らし働く

自分の当たり前は 相手の当たり前ではない

フィリピンで働いて、業務以外にもたくさん学びました。例えば、職場でのおしゃべりです。仕事の合間に話し、お菓子を食べ、笑っている。その様子に、最初は驚きました。

僕の中には、仕事中は静かに集中するという基準がありました。でも、一緒に働いた人の中には、会話することで気持ちを保ち、仕事を進めている人もいました。

定時で帰ることや、休みを取ることにも、僕が慣れてきた感覚との違いがありました。帰宅を急ぐ背景には、渋滞の厳しさや、家族と過ごす時間があります。

もちろん、一つの職場での経験を、その国のすべての人に当てはめることはできません。日本人同士でも働き方は違います。

ここで大きかったのは、相手を一方的に評価する前に、自分の基準そのものに気づいたことでした。

同じ英語が話せても、仕事で大切にすることまで自動的に同じにはなりません。何を求めているかを説明し、相手の事情を聞く。そのやり取りも、仕事をするためのコミュニケーションでした。

楽しそうに働く人を見て考えたこと

マニラで同僚とファストフード店へ行ったとき、店員たちが音楽に合わせて体を動かしながら働いているのを見たことがあります。最初は、特別な催しなのかと思いました。

その光景を見て、働くことと楽しむことを、自分は離して考えすぎていたのかもしれないと思いました。

仕事では、正確さも、責任も、成果も必要です。そのうえで、同僚と笑うことや、場を明るくすることも、一緒に働く時間に影響します。

オーストラリアで会話を避けていた自分を振り返ると、業務だけこなせばいいという考え方には、見えていない部分があったのだと思います。

英語を学ぶと、相手の言うことが分かるようになります。それと同時に、自分と違う考え方が、以前より具体的に見えてきます。そこからどう付き合うかは、語彙や文法だけでは決まりませんでした。

仕事の同僚が 家族になるまで

フィリピンで出会った人の中に、後に妻となるアイヴァンがいました。

最初は、オンライン英会話会社の日本人スタッフとフィリピン人講師という関係でした。彼女が在宅で教えていた時期には、直接顔を合わせる機会も多くありませんでした。

その後、彼女がオフィス勤務になり、日常的に話すようになりました。

出会ったときから、将来の結婚を考えていたわけではありません。同僚として話し、友達になり、相手を知る時間がありました。

僕がフィリピンへ行ったのは、結婚相手を探すためではありませんでした。それでも、英語を学び、海外で働くと決めたことが、後の家族につながっています。最初に立てた目標の中にはなかった出来事です。

英語があったから、挨拶の先まで話せました。仕事の悩み、過去の経験、価値観、将来どうしたいか。そんな話を重ねる中で、人との距離は変わっていきます。

だから僕にとって、英語が話せる意味は、会話の人数が増えることだけではありません。これまでなら知る機会の少なかった人を、深く知る可能性が生まれることでもありました。



フィリピンの英会話会社で、同僚と過ごした時間。妻との出会いを振り返った記事より。

家族に会ってもらう前の不安

アイヴァンと一緒に、年末年始の日本へ帰ったことがあります。約10日間の滞在で、両親や親戚、親友に会ってもらいました。

両親とはすでに会っていましたが、親戚に紹介するのは初めてでした。どう受け止められるだろう。本人は緊張しないだろうか。僕の中にも、不安はありました。

実際に会ってみると、想像していた以上に自然でした。食事をし、飲みながら話し、地元で過ごす。親戚が彼女に関心を持ち、会話する姿を見て、僕自身も安心しました。

姪ともすぐに仲良くなりました。言葉が完璧に通じなくても、一緒に過ごすことから関係ができていく。その様子を、家族の中でも見ました。

文化の違いはあります。でも、国籍について先に説明し尽くそうとするより、その人自身を知ってもらう時間が大きかった。僕にとっては、そんな日本滞在でした。

今の僕から 当時の自分へ

相手を早く理解したつもりにならず、何を大切にしているのか聞いてみてほしい。職場の人にも、妻にも、家族にも、それぞれの事情がありました。英語を学んで増えたのは、そうした話を聞ける機会でもあったと思います。

この章から 違いの背景を聞いてみる

考え方が違うと感じたとき、すぐに国籍や性格で説明せず、「どうしてそう考えるのか」を一つ聞いてみる。仕事であれば、担当範囲や優先順位を確かめる。

相手の事情を聞くことは、違いをなくすためというより、一緒に行動するための情報を増やすことだと思います。

第 6 章 海外経験を 自分の仕事に変える

会社を嫌いになったからではなかった

フィリピンで働く中で、仕事の幅は広がりました。英語を使うだけでなく、教材を作り、人を支え、チームで仕事を進める経験もできました。会社員としての仕事には、学ぶことも楽しさもありました。

それでも、自分で事業をしたい気持ちは残っていました。父や親戚に、自分で仕事をしている人がいたことも、影響していたと思います。

会社が嫌だったから辞める、というだけの話ではありませんでした。自分が学んできたことを使い、提供するものを自分で考え、その結果を引き受けてみたかったんです。

もう一つ、妻と日本、フィリピンを行き来しやすい働き方を作りたいという思いもありました。

帰りたいときに帰れること。どこにいるかを、仕事だけで決めなくてよいこと。それは、僕たちの暮らしを考えるうえで大事でした。

近くで独立した人を見ていた

友人に、会社員を辞め、独学でプログラミングやオンラインビジネスを学んで独立した人がいました。その生活を近くで見たくて、一緒に部屋を借り、一年間暮らしました。

成功談を遠くから聞くことと、日常の仕事ぶりを見ることは違います。自分で考え、手を動かし、仕事を作る人が近くにいる。そうした環境の中で、自分にも試せることがあるかもしれないと思うようになりました。

2018 年 5 月、僕は会社を辞めました。そこから、講師の採用やトレーニング、教材制作、質の管理など、オンラインでサービスを提供するための準備を進めました。

2019 年に RYO 英会話ジムを正式に創業しました。

独立すると、自分で決められることと、不安になることが同時に増えました。毎月の給料が入る仕組みを離れると、収入も仕事の量も、自分の行動に大きく左右されます。

やりたいことを思いついて楽しくなる日もあれば、このままで大丈夫だろうかと不安になる日もありました。自由に決められることと、決めたことを引き受けることは、同時に来ました。



独立のきっかけをくれた友人カズさんと暮らした、フィリピンの住まいの風景。

海外にいたことを 誰の役に立つ形へ変えるか

帰国して、自分で英語の仕事を作ることを選んだとき、海外に長くいたという経歴だけでは足りないと感じました。

海外で何をしたのか。何に困ったのか。そこから学んだことを、誰に、どんな形で届けるのか。そこまで具体的にしなければ、仕事にはなりません。

僕の場合は、自分が話せなかった経験、海外で働いた経験、教材を制作した経験、日本人学習者の課題を見てきた経験を、記事とレッスンにしていきました。

オーストラリアで感じた「知っているのに、込み入った話には入れない」という問題も、学習者に伝えられる材料になりました。ただ

英語を覚えるだけでなく、実際に伝える練習が必要だと、自分の経験から説明できたからです。

一つの経験だけなら、珍しくないかもしれません。それでも、英語、海外勤務、教材制作、指導、発信を重ねると、自分が提供できるものが少しずつ見えてきました。

ブログを書く仕事は 地味だった

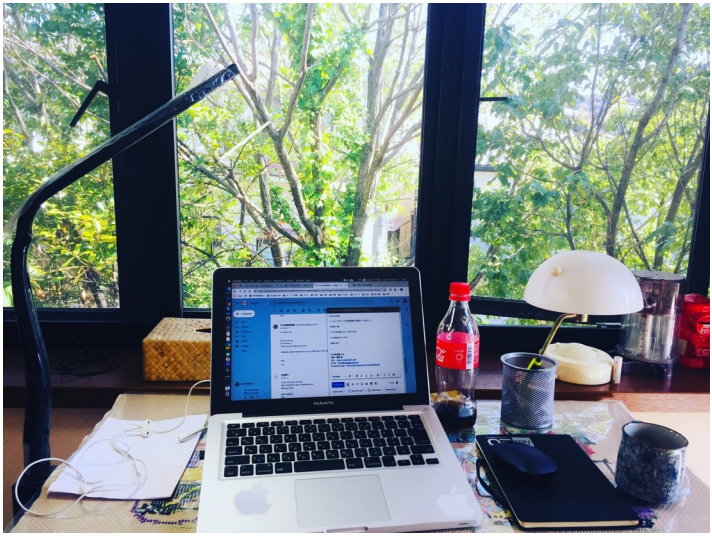
会社を離れると、以前より記事を書く時間が取れるようになりました。会社員時代には月 10 記事でも大変でしたが、独立直後は月 20 記事以上を目標にしました。

記事を書いても、すぐに問い合わせが来るとは限りません。書いて、見直して、サービスを整える。少しずつ反応を確かめる日々でした。

同じテーマの記事が、すでにほかにもある。それなら、自分が書く意味はあるのか。独立初期のブログには、そんな迷いも残っています。

僕は、自分が実際に経験したことや、学習者が困っていたことを加えながら書きました。記事に英語の音声を入れたのも、文字だけでは発音や会話の流れが分からないと考えたからです。

このやり方で大事だったのは、記事をたくさん並べることだけではありませんでした。読者が何に困っているかを考え、読んだあとに何ができるようになるかを意識することでした。



独立して間もない頃の作業環境。日々の発信やサービスづくりをパソコンで進めていた。

アクセスがあっても 仕事になるとは限らない

長くメディアを運営する中で、PV が増えることと、サービスの利用が増えることは同じではないとも分かってきました。

英語表現の意味を一つ知りたい人と、仕事で英語が話せず困っている人では、必要としているものが違います。どちらにも役立つ情報は届けたい。

そのうえで、自分のサービスが役立つ人に、次の選択肢を分かる形で伝える必要がありました。

記事を読んで知ってもらう。レッスンで実際の課題に触れる。そこで分かったことを、また教材や記事に戻す。発信と現場の仕事が行き来する中で、事業を少しずつ育ててきました。

これは、記事を書けば同じ結果になるという方法ではありません。検索やメディアの環境も変わります。ただ、読者や生徒さんの実際の困りごとへ戻ることは、手段が変わっても必要だと思っています。

自分で決められる日は 自分で終わらせる必要もある

独立初期には、生産性にも悩みました。午後 6 時に終えたいと思っていたのに、気づくと深夜。優先する仕事を決めたつもりでも、後回しにしてしまう。自分の感情の波も、仕事に影響します。

場所を選べることと、時間をうまく使えることは別の課題でした。自由な仕事を作る過程には、自分の生活を管理する地味な作業もあります。

自分で事業を始めたことが、すべての不安を解決したわけではありません。それでも、自分が届けたいものを考え、改善する仕事を続けられることは、僕にとってやりがいになっています。



海外で出会った仲間と囲んだ食卓。各地で英語を使った経験を振り返った記事より。

今の僕から 当時の自分へ

すぐに結果が出なくても、焦らなくていい。会社を離れると、商品も発信も、お客さんとの関係も、自分で育てる必要がありました。

アクセスの増減だけで一日を判断せず、誰のどんな困りごとを解決したいのかに戻ってほしいです。

この章から 経験を役立つ形に言い換える

「海外に住んだ」「英語を学んだ」で止めず、そこで自分ができるようになったことを一つ書いてみてください。次に、その力で困りごとを減らせそうな相手を考えます。

相手、困りごと、提供できるもの。この三つがつながると、経験を仕事へ変える案が具体的になります。

第７章 暮らす場所と人とのつながり

日本へ戻ることも 自分で選んだ

海外に住んでいると、帰国することを後戻りのように感じる人もいるかもしれません。でも、僕がフィリピンから日本へ戻ったときには、自分なりの理由がありました。

両親と過ごす時間を大切にしたい。妻に、僕の家族や地元との関係を深めてもらいたい。自分の原点に戻って仕事を整えたい。

海外で働いたあとだからこそ、日本の静けさや便利さ、安全な生活環境のよさも、以前より感じるようになりました。

帰国から数年後、父の病気が分かり、やがて父は亡くなりました。あのタイミングで帰っていたことを、今も大切に思っています。

いつでも会えるつもりでいる相手と過ごせる時間には、限りがありました。

海外へ出ることが自立で、日本へ戻ることが妥協という、単純な分け方ではありませんでした。自分にとって何を大切にしたいかは、経験や家族の状況によって変わります。

暮らす場所を選べる意味は、遠くへ行けることだけではありません。大切な人の近くにいることも、自分の意思で選べる。そのための働き方を作りたいと思いました。



旅先で知り合った仲間たちと。海外の交流イベントについて振り返った記事より。

移動できても 会話が始まるとは限らない

2020 年からは、海外を拠点にオンラインで仕事を続けるようになりました。自分の経験を仕事にしながら、いろいろな国で生活し、人と話す。その形は、学生の頃から一度に描けていたものではありません。

移動する生活でも、自分から何もしなければ、その場所の人と関係ができるわけではありません。宿泊先と仕事場を往復し、スマートフォンを見て一日を過ごすこともできます。

一方で、同じ場所にいても、短い挨拶から一日の記憶が変わることがあります。釜山の海雲台のホステルで、朝のダイニングにいた女性へ「Good morning.」と声をかけたときがそうでした。

彼女はニュージーランドで育ち、両親はシンガポール出身でした。最初は英語のアクセントの話をしていたのに、旅行、家族、働き方、日本への旅と、話題が広がりました。

彼女は会社と交渉し、無給休暇も組み合わせて、2ヶ月の旅をしていました。そんな働き方をしている人がいると知るだけでも、自分が当然だと思っていた範囲が少し広がります。

英語が使えると、調べた情報を読むだけでなく、今、目の前にいる人の生活を聞けます。セブで年上の留学生たちから刺激を受けたときと、つながる経験でした。



上海と釜山を巡った旅で利用したホステルの共有スペース。

相手が学んだ言葉にも その人の人生があった

上海のホステルでは、日本語がとても流暢な中国人女性と出会いました。日本のドラマをきっかけに日本語を学び、留学し、日本の企業で働くようになったと聞きました。

彼女とは上海の街を 2 万歩以上歩きながら、仕事や日本、中国、旅行について話しました。僕にとって強く残ったのは、有名な場所を訪れたことだけではなく、一緒に歩き、話した時間でした。

この交流では、彼女が身につけた日本語にも支えられました。相手が学んできたことと、自分の経験が、言葉を通して交わる。その面白さも感じました。

言語を学んだから、自動的に人生が決まるわけではありません。ただ、学んだ言葉を使って入れる場所や、人に出会える場面は増えます。そこからどんな関係が続くかは、また自分と相手次第です。



上海の街を歩いた日の風景。

AI を使いながらも 自分で話したい理由

旅の会話を重ねる中で、僕は AI 翻訳と自分で話すことの違いについても考えました。

翻訳が必要な場面はあります。言葉の確認や、正確さが大切なやり取りでも、道具に助けてもらえることがあります。僕自身、AI を仕事や学習に使っています。

そのうえで、人と雑談をし、関係を深めたい場面では、できるだけ自分で話したい。相手の言葉に反応し、笑い、分からなければ聞く。その流れに、自分の目と耳と声で参加したいからです。

必要なときにはスマートフォンにも頼ります。そのうえで、自分の言葉で声をかけられるようにもしておきたいのです。

話す前には、言いたいことを整理する。終わったあとには、言えなかった表現を調べる。

そうした準備や振り返りを AI に助けてもらい、実際の会話でも試してみる。今の僕は、その使い方に価値を感じています。



台湾のホステルでの交流を振り返った記事に掲載した、食事の一枚。

今の僕から 当時の自分へ

遠くへ行くことと、そこで人とつながることは、別々に考えてほしい。旅先でも、自分から挨拶し、相手に関心を持ったときに会話が始まりました。

暮らす場所を選べるようになった今も、その一言は自分から伝えたいです。

この章から 一言の先を聞いてみる

挨拶できる場面があれば、そのあとに相手に関心のある質問を一つ加えてみてください。旅行中なら、今回の旅で楽しみにしていること。仕事なら、今取り組んでいること。

長く話すより、答えを聞いてから次を考えることを大切にしてみてください。

第 8 章 英語を自分の言葉にする練習

僕が何度も戻ってきた学び方

ここまで、留学や仕事、人との関係について書いてきました。では、英語そのものは、どのように伸ばしてきたのでしょうか。

振り返ると、僕が繰り返してきたのは、実際に話す、言えないことに気づく、調べる、声に出す、もう一度使う、という流れです。

基本の語彙や文法を学びながら、実際の会話も重ねました。話してみると、次に何を学びたいのかがはっきりすることがありました。

セブでは、友人へ伝えたいことが学習の理由になりました。オーストラリアでは、理解できないまま会話を避けることが、仕事の課題になりました。

フィリピンでは、職場と生活の両方で同じ表現を使ううちに、言葉が出るまでの負担が減っていきました。

どの方法が誰にでも同じように合うとは言えません。でも、英語を話すことが目的なら、自分の口から出す練習と、相手に伝わったかを確かめる機会は、取り入れてほしいと思います。

練習 1　使いたい場面を一つ決める

まず、「英語が話せるようになりたい」を、一つの場面へ絞ります。

旅行で部屋の問題を説明したい。仕事で遅延の理由を伝えたい。相手の週末の話に反応したい。そのくらい具体的なほうが、必要な言葉を選びやすくなります。

次に、その場面で自分が伝えたいことを、日本語でもいいので短く書きます。難しい意見を無理に作る必要はありません。自分が実際に言いたいことを材料にします。

例えば、「今週は忙しかったけれど、週末は少し休めた」と話したいなら、その内容を自分の使える英語で言ってみます。最初から一番自然な表現を探すより、まずどこまで言えるかを確かめます。

練習 2　止まった場所を記録する

一度話したら、何が難しかったかを残します。単語が出なかったのか、文の順番が分からなかったのか、内容を考えるのに時間がかかったのか。ここを区別すると、必要な練習も変わります。

単語が一つ分からなかっただけなら、その語と自分の例文を確認する。説明が長くなったなら、まず結論、そのあと理由という順番にしてみる。聞き取れず返せなかったなら、相手の発言と、聞き返す言葉を確認する。

全部を一度に直そうとすると、自分の発言を見返すこと自体が重くなります。最初は、次に使いたい表現を一つ選ぶだけでも構いません。

僕が英会話の指導で発言を文字にして確認することを大切にしているのも、何となくできた、何となくできなかった、で終わらせたく

ないからです。実際に言ったことが残ると、次の練習につなげやすくなります。

練習 3　短い表現を 場面と一緒に声に出す

調べた表現は、目で見て理解するだけで終わらせず、声に出してみます。ここで使う英語は、長くなくて大丈夫です。

Could you say that again?

もう一度言ってもらえますか。

Let me think for a moment.

少し考えさせてください。

What do you mean by that?

それはどういう意味ですか。

意味を知っていることと、その場で言えることは違います。例えば、相手の話が聞き取れなかった瞬間を思い浮かべ、聞き返す言葉を口に出してみる。場面と結びつけることで、次に取り出す練習になります。

音声があれば、発音やリズムも確かめます。速く読めることだけを目標にせず、自分が相手へ言うつもりで練習してみてください。

練習 4　英語と一緒に 話の順番も短くする

単語が簡単でも、何を言いたいのか分からない説明は、相手に伝わりにくくなります。言葉に加えて、話の順番も整理してみます。

例えば、予定を変えたいと伝えるなら、まず希望、そのあと理由を短く言います。

Could we move the meeting to Friday? I need more time to check the figures.

会議を金曜日に変更できますか。数字を確認する時間がもう少し必要です。

これは練習用の例文です。自分の仕事や予定に置き換えれば、使いたい内容になります。

会議を別の日にしたいのか、少し遅らせたいのか、理由は何なのか。その中身が決まると、英語の組み立てにも集中しやすくなります。

相手が理由を聞いてきたら、そこで補足します。最初からすべてを長く説明しようとせず、相手の反応に合わせて加える練習もできます。

練習 5　会話から消えないための言葉を持つ

僕がオーストラリアで困ったのは、分からないときに会話を避けてしまったことでした。完璧な答えが出ないことと、何も言わないことは違います。

例えば、相手の依頼を確認したいときには、次のように言えます。

Just to check, do you mean we should finish this today?

確認ですが、今日中にこれを終えるという意味ですか。

自信がないときでも、確認することで会話を続けられます。聞き返す、考える時間をもらう、理解を確かめる。

そうした言葉は、知らないことを隠すためではなく、相手と一緒に話を進めるためのものです。

すべてに即答することだけを目標にしなくて大丈夫です。分からないときにも、相手へ状況を伝えられるようになる。その練習にも意味があります。

練習 6　AI に頼る部分と 自分で確かめる部分を決める

練習の準備や振り返りには、AI も使えます。例えば、次のように依頼できます。

「会議の日程変更をお願いする練習をしたいです。私が先に英語で話すので、あなたは同僚として返答してください。練習後に、伝わりにくかったところを二つ教えてください。改善例は、短く、私が使いやすい表現にしてください」

これは、この本のために作った練習用の指示例です。旅行や雑談の場面に置き換えても使えます。AI にすぐ答えを書いてもらうだけでなく、先に自分で話す条件を入れると、現在地を確かめる練習になります。

ただし、AI の提案がいつでも自分の意図や、その場の人間関係に合うとは限りません。自分が言いたかった内容と同じか、丁寧さは場面に合うかを確認します。

必要なら、講師や実際の会話相手の反応も手がかりにします。

道具で練習をしやすくしながら、最終的には、自分で相手に伝えてみる。その接点を残したいと思います。

一週間の小さな実践

最初の一週間は、一つの場面を繰り返してみてください。一日目に、自分の英語で話す。二日目に、止まった箇所を調べる。三日目に、短い改善例を声に出す。

四日目に、内容を少し変えて言う。五日目に、相手から質問された場合を練習する。六日目に、会話やレッスンで試す。七日目に、最初より何が言いやすくなったかを確認します。

この日程は、生活に合わせて変えて構いません。毎日新しい表現を増やすことより、同じ内容を、少し違う質問にも対応しながら話せるかを見てみます。

最後に残す記録は、「上手だったか」だけではなく、「何が伝わり、次は何を変えるか」です。一つずつでも、自分の経験と結びついた言葉が増える。その積み重ねが、僕の英語を使いやすくしてきました。

おわりに 小さな会話から始める

子どもの頃、家で外国人と身ぶりを交えて話していた僕は、英語の仕事をすることも、海外で家族を持つことも想像していませんでした。

セブへ行き、英語を使う楽しさを知りました。オーストラリアでは、自分の力が足りないことを痛感しました。

日本へ戻って進路に迷い、父の言葉をきっかけに海外就職へ向かいました。フィリピンで仕事を覚え、同僚や友人、妻との関係の中で、自分の英語も育ちました。

そこから自分で事業を作り、暮らす場所を考えるようになりました。途中で、それまでの自信が崩れたこともあります。それでも、過去にできなかったことが、後の自分の仕事や、人を理解する手がかりになりました。

英語を学んだことで、すべての問題が解決したわけではありません。仕事で必要な力も、生活を支える準備も、人間関係を続ける努力も必要です。

ただ、英語があったことで、僕がその課題に向き合う場所と相手は増えました。

もし今、自分にはまだ何もないと感じているなら、大きな決断の前に、一つだけ試してみてもいいと思います。

気になる人に話しかける。自分のしたいことを短く英語で言う。求人を一件読む。過去の経験を、誰かの役に立つ文章にする。

最初から、その先に何があるか分からなくても構いません。僕の 2 週間の留学も、後の 8 ヶ月や海外勤務、独立まで見通して始めたものではありませんでした。

次の会話で、自分が何に興味を持つのか。次の環境で、何が足りないと気づくのか。その反応を確かめながら、自分の選び方を少しずつ作っていけると思います。

僕も、これからまだ学びたいことがあります。今の英語で、以前うまくいかなかった場所へ行ったらどう感じるのか。知らない人と話したら、どんな考え方に出会えるのか。そうした楽しみは残っています。

この本を読んだ方が、自分に必要な英語を一つ使ってみる。その先で、小さくても新しい選択肢が見つかる。そんなきっかけになればうれしいです。

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

See you around!

横田 涼

著者について

横田涼。1985 年、大阪生まれ。英語コーチ、オンライン起業家。

セブとオーストラリアでの留学・滞在を経て、フィリピンを中心に 7 年間の海外勤務を経験。翻訳・通訳、教材制作、英会話指導、カウンセリングなどに携わる。

2019 年に RYO 英会話ジムを創業。学習者の発言を見える化し、添削と再実践につなげるアウトプット中心の学習を提供している。

2020 年から海外を拠点にオンラインで働き、英語コーチングに加えて、デジタルノマドに関する発信やコーチングにも取り組む。

RYO 英会話ジム　https://ryotoeikaiwa.net/

デジタルノマドハブ　https://remotedigihub.com/

本書と元記事について

本書は、著者が RYO 英会話ジムの「RYO ブログ」に掲載した体験談を中心に、テーマと時系列に沿って再構成したものです。ブログ掲載時の挨拶、関連記事の案内、重複する説明などを整理し、各章をつなぐ文章と実践用の問いを加えています。

英語の練習例は、過去の発言をそのまま再現したものではありません。

生活や仕事の場面は、著者個人が経験した当時の状況です。学校、職場、人によって環境や考え方は異なります。現行の渡航制度、雇用条件、留学費用などを案内するものではありません。

本書の素材となった主な記事を、章ごとに以下へ掲載します。記事の内容は、公開後に更新される場合があります。

第 1 章の主な元記事

英語がある家庭で育った僕が気づいたこと｜母とのリアルな体験が人生を変えた話

英語が自信になった瞬間｜自信のなかった僕の人生が変わったストーリー

第 2 章の主な元記事

セブ留学は 2 週間でも意味ある？21 歳で実際に行って感じた効果と限界

21 歳のセブ留学で人生観が変わった｜8 ヶ月の長期留学で英語以上に得たもの

8 ヶ月のセブ留学で英語力はここまで変わった｜初級から伸びた僕のリアルな勉強法

第 3 章の主な元記事

ワーホリ生活のリアル！オーストラリアで経験した初めての 4 つの挑戦

「英語力は使ってこそ！」オーストラリアで働きながら学んだ 6 つの真実

オーストラリアで働いて気づいた英語力｜セブ留学では見えなかった現実

涙と決断のワーホリラスト 3 ヶ月！オーストラリア生活の全貌

オーストラリアの共同生活は驚きの連続！忘れられない出会いと別れ

第 4 章の主な元記事

亡き父の一言が導いた挑戦：ワーホリ後、海外就職への道

仕事も遊びも充実！海外就職した僕が体験した最初の 180 日

英語が瞬時に出てこない原因は？僕も留学・海外勤務で何度も詰まった｜レスポンスを速くする 3 つの方法

第 5 章の主な元記事

【体験談】7 年間フィリピンで働いてわかった！日本人とフィリピン人の働き方の違い

英語を学んだ先でフィリピン人の妻と出会った｜国際結婚につながった僕たちの馴れ初め

外国人パートナーを日本の家族に紹介してみた｜不安だった僕が「国籍より人柄」だと感じた 10 日間

第 6 章の主な元記事

マニラ勤務から独立を決意！未知の可能性に挑み、自分だけの未来を切り拓く

【独立の現実】4 ヶ月間の挑戦で見えた 3 つの課題と突破法

英語を仕事にするには？海外勤務 7 年から独立して見えたキャリアの作り方

フィリピンで学んだ英語は世界で通用するのか？10 カ国で試して見えた“本当の英語力”

第 7 章の主な元記事

「英語がつないだ人生の転機」―7 年の海外生活から見えた“本当の帰国理由”とは？

AI 翻訳では生まれなかった。上海・釜山の旅で気づいた「英語で人とつながる本当の価値」

英語が自信になった瞬間｜自信のなかった僕の人生が変わったストーリー

フィリピンで学んだ英語は世界で通用するのか？10 カ国で試して見えた“本当の英語力”

第 8 章の主な元記事

8 ヶ月のセブ留学で英語力はここまで変わった｜初級から伸びた僕のリアルな勉強法

英語が瞬時に出てこない原因は？僕も留学・海外勤務で何度も詰まった｜レスポンスを速くする 3 つの方法

奥付

英語の先に 自分で選ぶ人生があった

著者　横田 涼

本文編集日　2026 年 11 月 14 日

表紙更新日　2026 年 11 月 15 日

本書の文章の構成・編集および一部の文章作成には AI を使用しています。表紙は著者の写真と AI 生成の背景を組み合わせています。本文写真は著者のブログ掲載写真を使用しています。

© Ryo Yokota